

「祈った先に」

ダニエル書 10 : 2 - 11

November.8.2020

## ダニエル 10 : 2 - 11 (パワポ)

### Preface

今、ダニエルは、彼の内に住まう主の霊に促されて、悲痛の断食祈禱をささげ、その期間が3週間にも及んでいました。

90歳の高齢のダニエルにとってしてみれば、傍から見ればそれは自殺行為のようにも映りましたし、

権力、地位、名誉、財産、人が羨むものをすべて手にしたダニエルが、何が惜しくてそこまでの祈りをささげているのだろうかと思われるような断食祈禱でした。

しかし、ダニエルは、祈らずにはいませんでした。

なぜならば、70年間待ち望んでいた祖国イスラエルに帰り、故郷エルサレムの復興と主なる神様を礼拝するための神殿建築という帰還事業が、思わぬ妨害が入り、滞っているだけでなく、

帰還した民たちが、二進も三進も行かず、自暴自棄のような状態になっているということを伝え聞いたからです。

70年間待ち望み、帰りたくて仕方がない故郷に帰ることも出来なかったダニエルにとって、その痛みの知らせは、身を裂かれるような思いでした。

この時のダニエルは、当時の中東世界の覇者ペルシアの王に次ぐ権力者でしたから、その権力を用いて、解決方法を探ることは、いくらでも出来たはずですが。

にもかかわらず、ダニエルが真つ先に選択し、実行した手段は祈りでした。

ダニエルにとって、祈りは、権力よりも、財力よりも、知識や経験よりも確実で、確かなものでした。

神に直接介していただくことほど、確固たるものないという確信がありました。

ダニエルは、祈ることしか出来ないから祈るのではなく、祈ることこそ最善であり、また、祈りを待っておられる主なる神様に訴えることこそ、唯一の真の解決だという確信の元、祈っていました。

自殺行為どころか、そこにこそ、生きる道があるという確信の元、祈っていました。

## Part One

このダニエルの姿勢こそ、滅びてしまったイスラエルが失敗したことでした。

神よりも人、神よりも権力・財力・軍事力、まことの神よりも偽の神、まことの神の言葉よりも人の言葉、まことの神に祈るよりも偽りの霊による占いに聞き、神の前に降参するよりも人の作りだした風習、伝統、社会構造の前に屈服し、結局神に選ばれし神の民イスラエルが滅びてしまいました。

主なる神様以外に頼ることが、自分の身を滅ぼすことに繋がると、何度も語られ、教えられ、諭されたにもかかわらず、結局まことの神以外に頼ることよりも、自分たちが大切にしているものを大切に、国が滅びてしまいました。

そんな苦い経験をして、人の羨むものすべてを手中に収めてもなお、ダニエルが取った行動は祈りでした。

苦い過ちを繰り返すわけにはいかないと、人の羨むものに頼るのではなく、神により頼みました。

何よりも神に尋ね、神の御旨が何なのかを探り、神の言葉に聞くことに生きる道があるということを、体現してみせます。

逆に言いますと、ダニエルを通して、ダニエルの生き様・その生涯に主が込めたかったのは、主により頼むという真実性の体現です。

主に寄り頼むことこそ、まことに生きる道であり、そこにこそ、人の秤では測ることの出来ない神の望まれる繁栄があるんだということの体現です。

主なる神様は、ご自分の民を諦めることは決してされません。

人は神を諦めることがあります、神は人を諦めません。

だから、人に関わることを辞めることは決してなさらず、愛を全うされます。

愛しておられるがために叩き、愛しておられるがためにお灸をすえ、愛しておられるがために痛いところを通らせなさいます。

それに対して、私たちは、残念に思い、恨めしくて、名残惜しくて、憎しみまで湧き上がってきて、放っておいてくれと思いますが、放っておくと、今よりもはるかにとんでもないことになることを、神様は私たちよりもずっと正確に知っておられますから、放っておくことなかなさいません。

神様が間違っていることは皆無です。

もし神様が間違っていると思えるならば、それは、私たちが神様について、なおも知らないからです。

ダニエルは、前回のメッセージの時に触れましたが、「こんなことが起こっていいのか！？ 神様、あんた間違っているよ！」と思える状況でも、祈りました。

なぜなら、神が間違っているのではなく、私たち人間の方が神の御思いを知らないから、間違っているように感じるんだということを知っていたからです。

そして、肉体の命を保つための食を断ち、霊の命を保つための祈りを捧げました。

## Part Two

そんな祈りを捧げていたダニエルが、先ほど読みました聖書箇所を見ますと、メソポタミア文明の基となったティグリス川の岸にいたと書かれています。

断食祈祷の苦しみを和らげたい、もしくは、気分転換をしたいと思ったのでしょうか、ダニエルは、部下や家に仕える者たちと一緒に、川辺に来ていました。

すると、そこで、ダニエルは幻を見ます。

### ダニエル10：4－9（パワポ）

ダニエルの前に、亜麻布の衣をまとい、金の帯を締め、光り輝く緑柱石のような胴体に、稲妻のような顔、そして目はたいまつ、腕と足は磨き上げた青銅、その声はとどろきのような、人の姿をした方が現れました。

この人のような姿をした方の特徴を見ますと、黙示録1章に出てくる主イエス様の天上での御姿にそっくりなんです。

### ヨハネの黙示録1：13－19（パワポ）

ここでヨハネが、幻のうちにお会いした主イエス様のお姿と、ダニエルが、幻のうちにお会いした人のような姿をした方は、そっくりです。

しかも、ヨハネもダニエルも、この方の前にあって、死んだ者のように気を失い、全くもって無力になっています。

つまり、断食祈祷をしているダニエルにティグリス川の岸辺に現れなされたのは、確かに主イエス様でした。

お召しになっている服と金の帯は、人と神を繋ぐ役割を担っている大祭司であり、万物の王であられることを表わすものです。

また、稲妻のような顔、緑柱石のような体、磨き上げた青銅のような腕と足は、その威光と尊厳を表し、

燃えるたいまつのような目は、永遠の先を見据える洞察力を表し、とどろきのような声は、語る御言葉の生命力、力強さ、鋭さ、分別力を表すものです。

ただし、この幻のうちに現れたイエス様を見て、認識できたのはダニエルだけでした。

一緒にいた部下や仕える者たちは、何かとてつもない方が現れ、何かとてつもないことが起こっていることまでは感じましたが、皆恐怖に襲われ逃げるだけで、誰一人として、主イエス様の現れを見抜くことは出来ませんでした。

ダニエルだけが、幻のうちに現れたイエス・キリストの実体と本質を見抜きました。

ここでひとつ教えられることは、誰もが、イエス・キリストに価値を見出すわけではないということです。

イエス・キリストに神の奥義を見出し、その啓示を感知し、その方の御言葉を悟れるわけではないということです。

### Part Three

#### ヨハネの福音書 6 : 66 - 71 (パワポ)

この言葉を話される前に、イエス様は、二匹の魚と五つのパンを用いて、男だけでも5,000人以上、女性や子供まで含めると10,000人以上の人たちが、お腹いっぱいになるまで食べさせるという奇跡をなさいました。

すると、この給食の奇跡を体験した人のみならず、そのうわさを聞いた人たちが、イエス様のところに押しかけてきました。

そこで、イエス様が、「わたしがあなたがたに食事を提供したのは、わたしを信じれば食べることに困らなくなりリッチになるということではなく、わたしこそ、あなた方に永遠のいのちを与えるために天から下ってきた生けるパンです。

パンであるわたしの肉と血を食すことがないならば、その者のうちにいのちはありません。でも、もし食すならば、永遠のいのちが与えられ、死んでも生きます。」という話をしたところ、弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエス様と共に歩もうとしなかったというのです。

この目に見える肉体の繁栄のためならば、イエスを信じてもいいけれども、永遠のいのちとか、天国とか、神の与える使命に生きるなんて言う怪しいことは、お断りさせていただきますということです。

つまり、イエスキリストの実体とその本質を見抜ける者は多くなかったということです。

さらには、12弟子のうちの一人、イスカリオテのユダも悪魔に心を奪われ、主イエスの本質を見抜けず、裏切っていきました。

人ならば、誰もが、イエス・キリストの偉大さには、何だかよくわからないけれども、感じはします。

だからと言って、誰もが、主イエス様の実体と本質を見抜き、その方と生きることを選び取っていくわけではありません。

しかも、主イエス様の実体と本質を見抜いた者たちは、百発百中、必ずや、その方の威厳と威光の前に、気絶するほどに無力になる経験をする反面、

イエス様の偉大さに、何だかわからないけれども感じる程度の人たちは、これはまずいと、抱いた恐れと共に、力の限り目一杯、逃げ去っていきます。

イエス様の言葉を聞いた弟子たちもそうでしたし、ダニエルに付き添っていた人たちもそうでした。

### ダニエル10：7－9（パワポ）

先ほども話しましたが、人に対して引け目など微塵も感じないような権力と学識と地位のあったダニエルですが、一人、主イエス様の実体と本質を察知し、見抜いたところ、

その前に、全くもって無力になり、その手に収めた世のどんな輝きも無益で、その語る言葉を聞くと、気絶してしまいました。

人間の誇るありとあらゆる誇りが、主イエスの前にあつては、何にもならないんです。

私たちもこれに似たようなことを経験することがあります。

一人聖書を読むと、その言葉が、正に目の前で神が語っておられるかのように身に迫り、涙が出て来て、その場にうなだれるしかないことがあります。

祈りを献げようと目をつぶると、祈る言葉を発することさえも、申し訳なくて、

申し訳なくて、ただただ、涙が出てきてしようがなく、冬になると食べる豚白菜鍋の煮えてくたくたになった白菜よりもくたくたになって、突っ伏して、ひれ伏すしかない時があります。

私たち人間が、真に、主イエス様の実体と本質を体験しますと、何もかもが切りあぐたに思え、ただただ、主イエスの愛に圧倒されます。

そんな私たちが、良く抱く疑問が一つあります。

それは、「神がモーセに、イザヤに、エレミヤに、直接会い語ったように、私にも神様が直接会い、語ってくだされば分かりやすいし、いいだろうに、なんでそうされないんだろう。ああ、もどかしい。」ということです。

でも、これは、ある意味非常に危険なことです。

もし、私たちが、神様に直接会い、語られるようなことがあったら、それこそ、気絶どころでは済まないでしょう。

神の直接のご臨在を前にして、平然としていられる人なんか誰一人としていません。

ダマスコの途上でイエス様と対面し、その語る言葉を直接聞いたパウロは、3日間、目が見えず、食べることも飲むことも、何も出来なくなってしまいました。

これが、私たち罪人が直接神のご臨在を前にして現れる唯一の反応です。

だから、私たちには、聖書と祈りがちょうどいいんです。

だから、私たちには、聖書と祈るという行為が与えられているんですね。

そこで、神秘としか言いようがないのが、私たちのうちに聖霊なる神がお住まいになっていると事実なんです。

#### Part Four

ダニエル書に戻ってみましょう。

今、主イエス様のご臨在に圧倒されて、気絶してしまったダニエルを、起こす手がありました。

#### ダニエル10：10－11 (パウロ)

今、ここで気絶してしまったダニエルを起こしているのは、主イエス様ではなく、天使ガブリエルです。

この10章は、イエス様と天使ガブリエルが交互に登場してくるのですが、ここでは、天使ガブリエルです。

天使ガブリエルは、8章や9章にも登場して、神に遣わされてダニエルに主の言葉を届けに来ましたが、ここでも、11節を見ますと、「私は今、あなたに遣わされたのだ。」と言って、ダニエルに触れて起こしてくれます。

聖書には、所々、天使が登場してきますが、天使の身分を不必要に高めたり、天使に祈るようなことは、決して教えていません。

むしろ、天使は、私たちクリスチャンに仕える存在であって、神が私たちクリスチャンを助けるために遣わす働き手です。

### ヘブル人への手紙1：14（パウロ）

とある通りです。

そんな天の御使いガブリエルが、ダニエルに言った言葉が心を打ちます。

### ダニエル10：11

それから彼は私に言った。「特別に愛されている人ダニエルよ。」（パウロ）

“特別に愛されている人ダニエルよ”という言葉は、ダニエルが神にとって一体全体どんな存在なのかを明らかにする言葉です。

つまり、神様にとって、ダニエルは、特別に愛する人なんです。

この言葉から教えられることは、神様の関心事は、私たちがどれだけ素晴らしい言葉で、どれだけ秩序立てて論理的に流暢に祈っているかではなく、“祈っているあなたは誰なのか？”ということです。

何百億円もする絵画よりも、下手でもいいから、お父さんの、お母さんの顔だと一生懸命に描いて、父の日母の日にプレゼントしてくれる子どもたちの絵の方が、よっぽど心の中心を熱くし、目頭が熱くなります。

セールスマンが、どんなに滑らかで、説得力のある宣伝文句を並べながら説明したところで、その商品を買いたいとは思いませんが、

自分の子供が、非論理的で、感情的で、衝動的で、全然理に合わない話し方なんだけれども、熱心に訴えられると、心が揺れて、変に説得されて、商品を買ってしまいます。

支離滅裂なんですけど、言いたいことが妙に伝わってきます。

なぜならば、自分の子供だからです。

神様にとって、大事なものは、何を祈るのかということよりも、誰が祈っているのかということです。

形を整えることよりも、特別に愛されている者と言う自覚があるのか？ということです。

だから、私たちは、神様に頭が上がりません。

1時間、ただただ、「助けてください。助けてください。」と、祈っているだけに、本当に助けてくださるんです。

なぜならば、クリスチャンは、神の子だからです。

神様の関心事は、口にしている言葉ではなく、誰がその言葉を口にしているのかです。

### Conclusion

悲痛の祈りを献げていたダニエルに、イエス様は、最も大事なことを教えてくださいました。

それは、「あなたは、わたしが特別に愛する者だ。」ということです。

祈った祈りが叶うか叶わないかということは二の次に、それを遥かに超える全く別次元の最も根本的なことを、教えてくださいました。

「大丈夫！ あなたは、わたしが特別に愛している人だから、安心なさい。」ということです。

身をささげるような祈りの先にあったのは、イエス様のお姿と、神の愛でした。

そして、“私という人は誰なのか？”という人類史上最も根源的で、すべての問題と不安を貫いた疑問に、教えてくださいました。

私たちが、問題や不安に翻弄され、押しつぶされそうになる時こそ、この根源的な疑問に対する答えが、力になりますし、そのことを、イエス様はよくご存じでられました。

だから、安心して、身を献げる祈りを献げましょう。

その先には、イエス様のお姿と、神の愛と、根源的な疑問に対する答えが待っています。

その答えこそ、私たちの力になります。

お祈りいたします。

祝祷：ダニエル10：11「特別～遣わされたのだ。」